

* モノクロの行方

1988年7月1日、東京天文台は国立天文台に改組転換された。こう書くと水沢の人、空電研から合流された方は異議ありと言われるだろう。国立天文台は、東京大学の附置研であった東京天文台、文部省直轄研の緯度観測所、名古屋大学の附置研であった空電研究所の太陽電波部門の3者がいっしょになり改組転換して生まれた。そして東京天文台自体が1888年に東京大学天象台、海軍観象台、内務省地理局の3者が一緒になり東京大学東京天文台となったのである。

1988年に国立天文台に改組転換された際、東京天文台の3講座と木曾観測所が東京大学に残され、東京大学理学部天文教育研究センター（通称理学部センターと呼ばれる）となった。そして理学部センターの建物が建設される予定地にあった東京天文台の太陽観測設備が現在のフレア望遠鏡などがある太陽観測所の場所に移転した。

その際、太陽観測の主要望遠鏡であったH α モノクロ太陽望遠鏡（通称モノクロと呼ばれた）の建物は取り壊され、モノクロはその製作者である三鷹光器に引き取られたのである。

三鷹光器では現在の社長である中村勝重氏が本格的に製作した望遠鏡として思い入れの深い望遠鏡であった。しかし、三鷹光器に譲られたモノクロは、現在は三鷹光器の駐車場に雨ざらしで放置されているような状態になっている。下の写真が現在のモノクロの哀れな姿である。



国立天文台になって20年、この望遠鏡で観測した兵にとっては涙が出よう。国立天文台は目の前の最新の研究に熱心であったが、かくのごとく古い観測器械を大切にしておこなった。今、天文情報センター・アーカイブ室ではこのような歴史的に貴重な往年の望遠鏡、測定器械を発掘、保存、展示しようとしている。上の写真のような光景を目にした中桐は、さっそく、三鷹光器に電話をして、現在は社長になっている中村勝重氏に国立天文台博物館構想を話し、このモノクロをお譲りいただけないかともちかけた。中村勝重氏にとっても彼の青春時代に渾身を込めて作り上げた名機であり、思い出は深い。それでも氏は先代社長の中村義一氏、専務の中村実氏と相談してみようといってくれた。先代社長の中村義一氏は東京天文台の元職員でもある。

今は朗報を待ちたい。下の写真が往年のモノクロである。

